
カンサイ！

アマゴン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンサイ！

【Nコード】

N2124G

【作者名】

アマゴン

【あらすじ】

今日から大学生活をスタートさせた、周りの目を気にして生活していく、ノリを大切にしている現代っ子な「俺」。彼の視点から描いた、これから始まる彼の大学生活の始まりの一日目を書きました。

第1話 始まりの日

春。俺は、とうとう関西で大学生になる。一人暮らしすることを周りの皆はスツゴイ楽しみにしてたけど、俺もそのうちの一人だ。親の目から解き放たれるこの時をどれだけ待ち望んでいたことだろうか。でも、もともと俺は関西出身やし、遊び場は変わらんやろなとか思いながら退屈な学長の話を聞いていた。経済学部経済学科。俺が入る学部と学科の名前だ。経済は世の中の中心を担っているから経済学部に決めました、なんて大それた理由じゃなくて、入れそくな、でもなるべく高い偏差値を誇る大学、って言う、ありがちな選択肢で決めた。すでに自分の将来決めて高校からの進路を選んだやつらもいたけど、すごいね。そんなこといつ考えてたの。まあ、いいか、俺は俺だし。てな感じで、俺の大学生活は今まさに始まるうとしている。

学長のつまらないであろう話が終わると、学部の学籍番号ごとにクラス分けが行われた。だが、学長の話は意外とウケがよく、「何かチョットお笑い入ってたな」とか、「笑えたよな」なんて聞こえてきた。クソ、聞いとけばよかったよ。会話入りづらいやんか。とか思っていると、メールの着信音が俺を一瞬ヒーローにした。というのは大袈裟で、着信音で教室にいた学生の大多数が一瞬だけこっちを見た。気がした。よかった、学長が喋ってるときじゃなくて。メールを見てみると、なんとただの迷惑メール。俺は色んなお店で会員になったりしてるから、宣伝メールが来るんだけど、クーポンとかついてるやつ以外は全部この呼び方をしている。だって、迷惑やん。ケータイを広げてボタンを押した労働力を悔やみつつ、ポケットにケータイを戻すと、後ろの席から突然

「今の！ゴイステじゃないですか！」

と後ろからのすごい声が俺を殴って、また一瞬だけ、俺を、いや、俺とそいつをヒーローにした。振り返って見ると、ポツチャリで、

メガネをかけた、オカッパな、黒髪な、しかもそれがチョット長くて、そして、手にはPSPを持った男が、ようするに少しデブの気持ち悪い男が俺を輝いた瞳で見つめていた。

「いいですよね！ゴイステ！いいですよね！！ボクもずっとファンなんです！！」

と、俺が知りたくもない情報を次々と俺に発してくる。まずい。周りに友達と思われるやんか。俺は自分で言うのもなんだけど、顔はワリといい方だ。だから女友達とか、彼女とかに困ることは今までなかったし、今までのクラスでは常に発言権のあるグループの中にいた。だから、大学生活しよっぱなの友達がこいつじゃ困るんだよ。周りになんて思われるか、考えただけでゾツとする。何がファンなんですだよ。敬語使わなくていいんだよ。俺は浪人してないから最悪お前と一緒に歳だろ。とか無駄なこと考えてるうちに、

「ボクはですな〜・・・」

「チョット待った。オレ、そんな好きちゃうし。そんな熱く語られても対応困るわ〜」

と、軽く受け流した。よし。これで喋っては・・・

「2枚目のアルバムが大好きで、いや、そのあと出したシングルもすごくいいと思うんですけどね、インディー時代のものよりはやっぱりメジャーになってからのですかね〜」

と、強制自己紹介を続けた。ハッキリ言って驚いた。こうゆう人種は普通、こんなアグレッシブに人に絡むことは、経験上少ない。そしてこの絡みづらさ、言えることはただ一つ、こいつは大学デビューしようとしている。大学で友達をいっぱい作って、彼女作って、なんて夢見ているのだろうか。しかししかし、その夢の第一号に俺ですか。まあいいや、適当に流して、

「どんなに強制的な自己紹介やねん。俺、一つもそんなん聞いてへんわ」

ドッ、と周りにウケた。

「ウワ、メツチャかわいそ〜やん。」

と周りが冷やかし気味に騒いだ。

「全然カワイソーちゃうわ！な！さとし。」

と、テキストな名前ですれを誘った。そしたら、

「え、何でボクの名前知ってるんですか？」

「え、キミ、さとして言うん？うそ！名前当ててもた！」

と、ここでここ最近一番のウケが起こった。いや、今日は笑いの神様が何か憑いてるんかも。と、たったこれだけのことだが、クラスが注目している中で行った会話には上出来だ。早くも、少し自分が中心的な立場になった気がした。と、そこで先生らしき人が入ってきた。しかし、その人は先生ではないらしいが、今後の俺達の大学生活のことについて話してくれた。まず、このクラスはあまり使われないこと。使われても2日に一回程度らしい。まあ、自分で講義を組み立てるんだから、一人一人時間割は違って当たり前なんだろう。そして、講義の登録の仕方について喋った後、先生ではない、先生みたいな人は去っていき、解散となった。とりあえず、初日ということもあって、クラス内はどこかよそよそしい空気が流れていたの、俺も今日はひとまず帰ることにした。まあ、部屋の片付けとかあるし。一人暮らしを始めて、家からもつて来た服とかはまだダンボールにインされてるから、とりあえず、部屋を普通の状態にしよう、と、決意して大学での一日目を終えた。

第1話 始まりの日（後書き）

今後も、主人公からの目線で、彼のこれからの大学生活を描いていきたいと思えますので、感想や意見などがあれば、遠慮なしに送ってもらえると嬉しいです。そして、何気ない空き時間のヒマつぶしになればと思いますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2124g/>

カンサイ！

2010年10月17日07時43分発行